様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　20 日現在

機関番号：　３２４１３
研究種目：　基盤研究(C)
研究期間：　2010　～　2012
課題番号：　２２５３０７１８
研究課題名（和文）　家族との共同行為をとおして形成される幼児の食事のスクリプト

研究課題名（英文）　Children's acquisition of meal-time scripts during family interactions.

研究代表者
上村　佳世子（UEMURA　KAYOKO）
文京学院大学・人間学部・教授
研究者番号：　70213395

研究成果の概要(和文)：　ままごと遊び場面では、発達初期には子どもの発話はほとんどなく、月齢に応じて食事や調理の見立てについての自発発話が増えていった。母親は食材や食器についての質問や道具使用などについての情報提供が多く観察された。食事場面では、母親は情報の確認や説明よりも、子どもが美味しくきちんと食事をすることを優先した働きかけをしていた。子どもの食事のスクリプトは、食事から見立て遊びのように文脈や意味の制約の異なる場面を越えて母親との相互行為を経験することで獲得され明確化することが示唆された。

研究成果の概要（英文）：　While playing "kitchen", the child talked less at the earlier times and increasingly more often at the later times by pretending that she was eating and drinking as well as cooking.　The mother asked questions about objects and cooking and gave information such as how to use kitchen utensils.　During mealtimes, on the other hand, the mother spent more time encouraging the child to eat more and to eat properly than in giving information.　These findings demonstrated that children acquire and form the meaning of meal-time scripts in crossing the boundary with their mothers from mealtime to pretend-play settings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：　社会科学
科研費の分科・細目：　心理学・教育心理学
キーワード：　食事, 共同行為, スクリプト, 幼児

１．研究開始当初の背景

食事行為は、人間にとって生物学的にも社会的にも重要な意味をもつ(今田,2005)。とくに社会文化的な行為としての食事は、主たる養育者をはじめとする周囲の他者との社会的行為のなかで獲得されていく(Valsiner,1987)。幼児の食事は食器や家具などの道具の導入と使用や「美味しいね」といったことばかをかけや顔を拭くなどという世話のなかでおこなわれ、養育者との共同

構成(co-construction)によって食事に対する態度やマナーが獲得されている。家族との食事場面は、子どもが食べ物や食器を文化的に適切なやり方であつかえるようになるという目標を達成できるよう社会的に構成されている。行為を媒介する道具や他者の介入が、活動や認識を制約し方向づけることにより、子ども自身の食事行為の意味の構築と適切な行動スタイルの形成がなされると考えられる。また、外山(1991)は、いつどのように食事行為が構成されているのか、どのような食事概念や手続が必要かという食事のスクリプトに焦点をあて、食事の手順、生理的意味、社会的意味などから分析をおこない、この認知的枠組は日常的活動への参加により獲得され意味づけられていくことを示した。幼児にとって、日常生活のなかでそれぞれの行動場面で適応的なことば遣いや行動様式を選択し使い分けるには、周囲の他者と共同で問題解決をしたり手がかりや評価を与えられたりすることが、場面への参加と適応的行為の習得の足場づくり(scaffolding; Bruner,1986)として機能する。

上村(2008)は、幼児の社会化を生活文化スクリプトの獲得と行動場面間の連環の形成の観点から記述している。子どもの一日の生活の生態学的観察をおこない、そこから子どもが家庭、保育園、近隣など、多様な生活環境を適応的に行き来するためには、社会的相互行為のなかで獲得した行動様式や言語スタイルを、異なる行動場面で他者に対して適用することで達成されることが示唆されている。他者との共同行為への参加の機会として、一日の生活のなかでもっとも注目されるのは、家族が集まる夕食場面である。これは子どもにとって食事行為の手続やその意味の獲得だけでなく、他の家族の家庭外での経験情報の交換の場所であり、多様な行動様式や問題解決方略の学習場面でもある。この夕食場面への幼児の参加やそこでかれらに期待される役割は、月齢によって変化していくものと考えられる。しかし、一日の生態学的観察のような研究資料では、幼児が食事場面における相互行為で獲得した経験や情報を確認するために、他の行動場面での行為や発話の偶然の出現を待つしかない。そのため、食事行為を幼児自身が主導的に展開できる場面を設定し、実際の食事場面における行為の手順やスタイル、ルールの行使や会話のしかたなどと比較することで、子どもが何を獲得しているかを検討することが期待される。

食事行為の手順やその意味が、月齢とともにどのように獲得されていくのかを明らかにするためには、吉澤(2001; 2002; 2005 ほか)の手続および結果との対照化が有効である。この研究では、１歳から３歳までの幼児と母親のままごと遊びを分析し、幼児の食事に関するスクリプトの構造化過程について検討している。そこから、幼児は日常生活の主要行為についての知識、調理や供応などの食についての手順、マナーなどの社会文化的知識の順で獲得しており、母親はルーティーン的なやりとりを構成するスロットを状況に応じて柔軟に提示するという結果を得ている。このままごと遊び場面における行為は、子どもの理解をある程度反映していることは間違いないものの、それが実際の食事場面での子どもの行為や認知的枠組とどのように関連するのかは明らかではない。そこで、ままごと遊びにおける幼児の行為の発達的変化を、実際の食事行為との連携という観点から検討することが求められているものある。

２．研究の目的

ままごと遊び場面および食事場面の３年間にわたる短期縦断的観察から、幼児の食事のスクリプトの形成過程を明らかにすることを目的とした。そこから、家族との共同行為をとおして、幼児はどのような食事行為や概念を形成していくのか、家族がどのような援助やことばかけをし、どのような道具（食器や家具など）を使用するのかを検討した。

子どものスクリプトの分析には、吉澤(2001 ほか)の食事のスクリプトおよびスロット分析の枠組を使用し、夕食場面とままごと遊び場面における幼児の行為の構造と機能の共通点と相違点を抽出していき、そこから子どもの食事行為と認識の発達過程を検討した。母子の相互行為の分析には、Kasuya,& Uemura(2005)および上村・加須屋(2008)の相互行為分析を援用し、それぞれの場面は家族が対象児に対してどのような意味を提供しているのかを分析した。さらに、養育者自身の食事概念や子どもへの期待を、絵本読みや線画場面での母子の語りから読み取り、相互行為を解釈をおこなった。

３．研究の方法

(1) 観察対象者：研究開始時に 12 ヶ月を迎える対象児とその母親 14 組を対象とした。

(2) 観察方法：家庭訪問をおこない、実際の家族との夕食場面、母親とのままごと遊び、絵本読みなどを介した語りの観察をおこなった。観察は、対象児が１歳から３歳までの期間に３ヶ月ごと、その後４歳までは６ヶ月ごとに９回（12, 15, 18, 24, 27, 30, 36, 42, 48 ヶ月時点）の家庭観察を縦断的におこなった。

(3) 分析方法：それぞれの時点において、夕食場面への対象児の参加を観察し、食事行為の発達的変化と家族の援助およびことばかけの変化を検討した。母子のままごと遊び場面での対象児の食事行為の観察し、生活場面

での行為が遊びのなかでどのように再現されるかを検討し、幼児の食事に関するスクリプトの理解について分析をおこなった。さらに、母親への面接調査から、母親が子どもに獲得させたいと考える食事に関するスクリプトや、母親自身の食概念を検討した。これらの調査資料は、それぞれの月齢時期の幼児の食概念のスクリプトが、生活場面や遊び場面で示される食事行為のなかで使用される道具、母親やその他の家族の役割、各場面における参加者の発話との関係で分析をおこなった。

４．研究成果

12 ヶ月時点から 48 ヶ月時点までの母子の共同行為の変化を縦断的にみると、その特徴から以下の 3 つの時期に分けられることが示された。

(1) 12 ヶ月から 24 ヶ月時点

ままごと遊びと食事場面のいずれにおいても母親主導で道具の選択や相互行為が展開することが観察された。食事場面では、子どもは基本的には受動的で、母親がことばかけをしながら食事が口に運ばれるのを待つ形で展開していた。18 ヶ月時になると、子どもは意思表示やスプーンを手にもちたがるなどの自発的な参加態度なども観察されたが、食事行為の自立性・主導性という観点では極めて低く、依然として母親への依存が高かった。

それに対して、ままごと遊び場面においては、最初は母親によって食器や調理器具の機能や食事のスクリプトについての説明を中心に相互行為が進められた。実際の食事場面を子どもに思い起こさせ、食事のマナーや食概念、食器や食材における危険（熱いからふうふうする、落とすと割れるなど）などの知識や技能が母親によって持ち込まれた。子どもは 18 ヶ月時点までは応答的に参加し、母親の問いや指示に反応していたが、24 ヶ月時になると、おもちゃの操作や発話による主導的なかかわりも観察されるようになり、食事のスクリプトが形成されていることが示唆された(図１参照)。

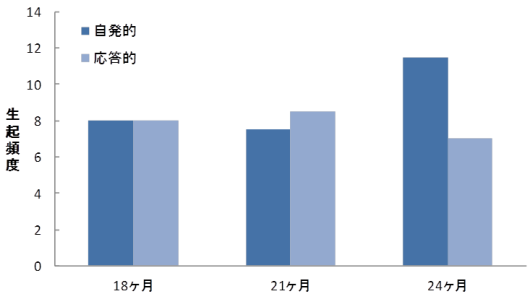

図1 ままごと遊び場面における子どもの発話（発声）

(2) 24 ヶ月から 30 ヶ月時点

ままごと遊び場面を食事場面と比較すると、以下のようなことが示された。いずれの場面も母子共同で構成されているが、母親の主導性は実際の食事場面のほうが高く、危険回避にかかわるルールやしつけの慣習に縛られて相互行為が進行する傾向（「それまだ熱いから待って」、「よそ見してないで食べないの？」など）が強かった。

24 ヶ月齢になると子どものことばによる応答が急激に増加し、ひとつの話題における会話交代の回数が増加した（「もっと」「あ、もう一杯ですか？では入れてください」「ジュー（母にお茶を入れるマネをする)」「ありがとうございます」)。

ままごと遊び場面は、食事場面で展開する相互行為を対照して展開されており、食事場面のスクリプト（「いただきます」、「ごちそうさま」など)、食事内容のイメージ化（「〇〇ちゃんの好きなリンゴジュース」、「昨日のフルーツヨーグルト」など)、役割交代（「普段ママがしているようにお野菜切ってください」、「お茶をもう一杯いれてくれるの？」など）という構成的な遊びの要素が最初は母親主導で展開し、月齢とともに子どもの意思の関与の比率が上がっていった（図２参照)。

２場面での相互行為は母子が共同で構成しており、食事場面で獲得したスクリプトが、ままごと遊び場面にも示された。ままごと遊びにおいては、母子の行為が形を変えて現れており、現実で生起する食事行為や発話がイメージ上の食事場面で再現されたり、母子がそれぞれの役割を交代したりすることが観察された。このような経験は、子どもがあらためて現実の食事行為やルールの意味を理解する機会を提供するものであると考えられた。

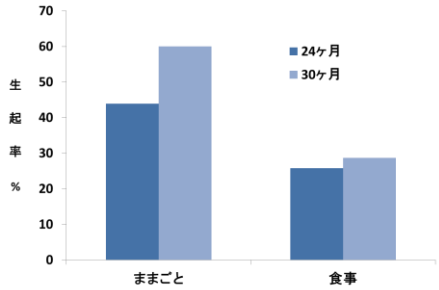

図2　2場面における子どもの初発発話率

(3) 30 ヶ月から 48 ヶ月時点

２場面における母子の相互行為を分析した結果、以下のような特徴が示された。24 ヶ月時のままごと遊び場面においては、子どもの主体的発話よりも応答的な発話の頻度が高く、主体的なものとしては「いただきます」や「どうぞ」など、食事場面の形式的な発話が多く観察された。場面設定や食器の選択な

どは母親主導で進められることが多かった。24ヶ月時の食事場面では、子どもがひとりで食べる傍らに母親がついて、ことばをかけながら口の周りを拭く、おかずを引き寄せるなどの世話を子どもの意志を確認しながらする形式で食事行為が展開していた。

36ヶ月時ままごと遊び場面においては、場面の展開の主導性はかなり子どもに移り、食事時の形式的発話や食器使い、調理などを盛り込んだ相互行為が長時間展開するようになった。母親は受動的、応答的に関わり、ことばによって子どもの行為の意味確認をするという特徴が示された。36ヶ月時の食事場面では、子どもの食事行為がかなり独立し、母親が補助的につくというよりは傍らで母親自身も食事をしながら時おり子どもにおかずを取り分けたり、その日の出来事について他の家族を交えて話したりといった相互行為が示された。

２時点を比較すると、子どもの食事のスクリプトの獲得が進むと母親の補助的働きかけは減少し、子どもは主体的に行為を展開する対等な相互行為者となっていくことが伺われた。母親の主導性はままごと場面よりも食事場面のほうがより多く示された。ままごと場面においては子どもに役割交替をあえて許し自由に場面を展開させることで、母親は遊びをとおして子どもに食事行為の意味や調理についての理解を促進させたり、食についての概念を学習させ動機づける機会としていることが示された。

(4) 考察

食事場面は、食べ物の概念、行為に伴うマナー、調理の手続き、他者との場面の共有など、多くの社会文化的な意味を含む場面と言える。ままごと遊び場面の母子相互行為の変化は、子どもの食器や調理器具などの道具の理解と、ことばによる相互行為への参加によって質的に変化することが示された。構成遊びは 18 ヶ月時からみられ、母親が主導的に関わることで双方的な相互行為が成立するようになった。24ヶ月時には言語能力が反映して、子どもから母への言語的応答や、「いただきます」などの形式的発話が多く出現するようになると同時に、母親との会話交換が観察されるようになった。さらに、30ヶ月時になると、子どもの自発的発話が増加して子どもが話題提供を担い、見立てた場面としてやりとりが長く続くようになり、母親は応答的、補助的に関わることが多くなった。

現実の食事場面では、どの月例でも母親主導の相互行為が展開された。24ヶ月時までは傍らに母親がついてことばをかけながら世話や介助をしていたのが、36ヶ月時になると、子どもの食事はかなり自立が進み、母親も傍らで自身が平行して食事をとる形式になった。実際の場面は「食べる」ということが最優先になるため、新しい試みや子どもの主導性は制限されるため、ままごと遊びの経験が食事に応用される部分もあることが示唆された。

(5) 今後の課題

24 ヶ月までのままごと場面への子どもの参加において、母親が食事場面での経験やスキルを確認し再生させることが繰り返し観察された。このことは、ままごと場面における見立て行為は、現実の食事行為に関する経験に基づいていることを示唆するものである。しかし、子どもの食事のスクリプトがある程度獲得されると、現実の食事場面に先行して、調理行為や食概念をままごと遊び場面で確認し経験することが母親によって導入されるようになった。いずれの場合においても、２場面間の知識や行為の関連づけは母親と共同でおこなわれることが示された。

今後の分析としては、子ども自身の認識の形成やその最構成に焦点をあて、食事場面とままごと遊び場面における行為について、子どもがどのように関連づけ境界を引いていくのかを明らかにしていくことが必要と考えられる。とくに、30ヶ月以降は、ままごと遊びが現実の場面における認識の形成や確認の機会として機能することが示されたため、調理に関する知識や日常の食事場面における他の家族との関係など、食事行為を成立させる文化的文脈環境にまで視点を広げて、子どものスクリプトの獲得を解明していきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計４件）

① Kasuya,H., Uemura,K.,& Yoshizawa,C. Mother-toddler interactions during mealtimes and while playing “kitchen” at home. JSLS(Japanese Society for Language Sciences) 2013 年6月29日　活水女子大学東山手キャンパス

② 上村佳世子・吉澤千夏・加須屋裕子　母子相互行為の中で形成される幼児の食事のスクリプト(1)　日本発達心理学会第24回大会　2013年3月15日　明治大学白金キャンパス

③ 吉澤千夏・加須屋裕子・上村佳世子　母子相互行為の中で形成される幼児の食事のスクリプト(2)　日本発達心理学会第24回大会　2013年3月15日　明治大学白金キャンパス

④ 上村佳世子・吉澤千夏・加須屋裕子　ままごと遊びにおいて示される食事のスクリプト　日本発達心理学会第 23 回大会

2012 年 3 月 9 日　名古屋国際会議場

６．研究組織

(1)研究代表者

上村佳世子（UEMURA　KAYOKO）

文京学院大学・人間学部・教授

研究者番号： 70213395

(2)研究分担者

吉澤千夏（YOSHIZAWA　CHINATSU）

上越教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号： 10352593

加須屋裕子（HIROKO　KASUYA）

文京学院大学・人間学部・教授

研究者番号： 60296291